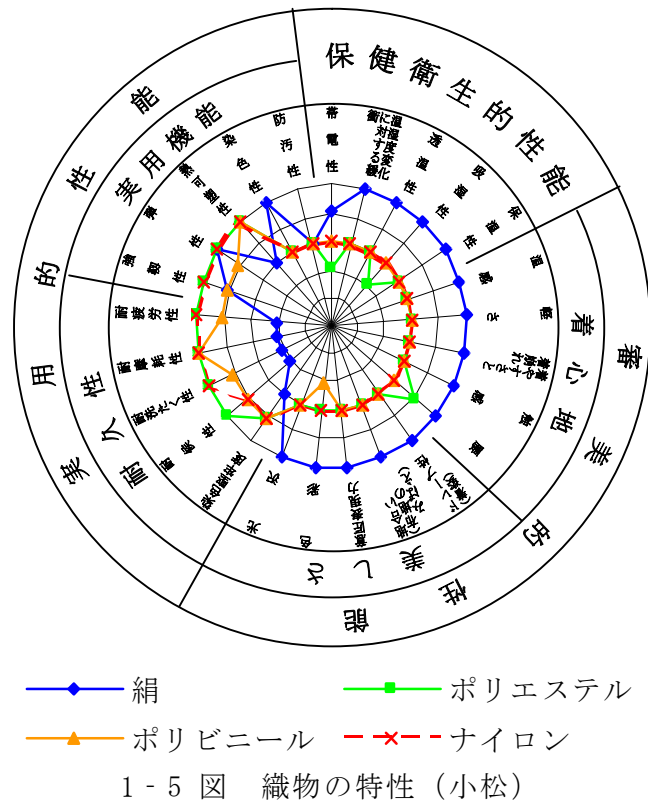


タンパク質の構成単位であるアミノ酸をつなぎあわせてポリアミノ酸を合成し、これを紡糸して繊維をつくることも試みられているが、絹に及ぶものはできていない。絹の特異な断面形態に似せてつくられたシルキー合成繊維も、素材の違いからくる本質的な相違をカバーできない状態である。このように絹はやはり蚕の体をとおして作られるのが、一番早道のようなのである。

絹、ナイロン、ポリエステル及びポリビニール繊維による織物について、実用的性能、審美的性能及び保健衛生的性能を比較してみると、絹が繊維としていかにすぐれているかということがわかる。



## 第2節 養蚕の起源

養蚕がどのようにしてはじめられたのか、またそれはどこでいつ頃だったのかということを確認な歴史によって証明することは非常に困難なことである。養蚕の起源を探るためには、考古学的方法で古い遺物や文献をくわしく研究することが必要である。また、現存している蚕やその近縁昆虫を生物学的に調べてみるのも、その一つの方法である。わが国では古くから、稲作の起源については種々の面からよく研究され、大体その全貌が明らかにされている。養蚕の起源についてはまだ十分ではないが、ある程度明らかにされている点について述べてみたい。

### 第1. 養蚕のはじまり

中国の元の王禎が書いた「農書」(1313年)の巻六に、「淮南王蚕経にいう。黄帝元妃西陵氏始めて蚕す。蓋し黄帝衣裳を制作る。因て此に始まる也。」の文章がのせられていて、これが中国における養蚕の起源として広く引用されている。ところが系譜上での黄帝とい

うのは、中国最古の王朝といわれる夏の祖先の禹のさらに祖先に当たり、日本歴史でいう天照大神のような存在で、実在の人物であるか否か不明で、歴史学的には現在では否定的である。しかし、このようなことから、中国では非常に古くから養蚕が行われていたということを想像することができる。

インドも中国と同様歴史の古い国であり、しかも現在家蚕だけではなく、いろいろな野蚕が飼育されているので、養蚕はインドではじまり、それが中国に伝わったのではないかという考え方もできる。このような考え方は、完全に否定することはできないけれども、考古学的遺物などの研究で、現在では養蚕がはじまったのは中国であると考えている学者が多い。

農業のはじまる前には、人類は自然にできたものを採ってきて食糧にし、あるいは衣類の原料にしていた。そのような時代が長く続いた後に、自分たちが生活している場所の近くで作物を栽培し、あるいは家畜を飼育するようになった。これが農業の起源と考えられている。養蚕も恐らく同じような過程を経て、蚕を飼うようになったのであろう。すなわち、最初は野山に自然につくられた絹糸虫類の繭を集めてきて、これを利用していた。しかし、野山から沢山の繭を集めるのは手数がかかるので、自分たちの住んでいるそばで蚕を飼育し、その繭を利用するようになったのであろう。

人類は最初繭から糸を<sup>つむ</sup>いで、それを衣料の原料にしていた。ところがある時、繭から糸を<sup>繰</sup>ることを発見した。繭から糸を繰るためには、蛾が出てしまった<sup>でがら</sup>繭では駄目で、蛾が出る前の繭をつかわなくてはならない。このように「<sup>つむ</sup>ぐ」ことから「<sup>繰</sup>る」ことへの繭から糸をとる技術の変革が、人類が蚕を飼育することを余儀なくされた大きな原因であると考えている学者もいる。しかも、この繰ることが発見されたのは、中国であったと考えられている。

このように養蚕は中国ではじめられたと考えられているが、それは大体いつごろのことであろうか。考古学的遺物から、すくなくとも殷の時代には養蚕が実在していた。すなわち、殷墟から発掘された甲骨文中に、蚕・桑・糸・帛などの文字があること、さらに青



1-6 図 甲骨文字（布目）  
下半部が野蚕繭の収穫をあらわすと思われる。

銅の斧や壺つぼに付着していた布を調べたところ、これが絹織物であることが明らかにされたことなどから、殷代（1700～1100B.C.）の北中国には明らかに養蚕が行われていたと考えられている。

一方、1926年に中国の山西省にある西陰村の彩陶期（2500～2000B.C.）の遺跡から、半分にされた繭殻が発見された。この繭殻は、現在の家蚕あるいは桑蚕のそれよりも小型であるので、蚕の繭であるとは断定されていない。これは、布目順郎博士によって現在でも長江流域付近に生息している *Rondotia menciana* の学名をもつ絹糸虫の繭に酷似することが確認されている。

## 第2. 養蚕の伝播でんぱ

前項で述べたように、中国の養蚕の起源は他国と比較にならないくらい古く、漢代（206B.C.～8A.D.）の絹などは中国のものとしてはむしろ新しいものに属する。このように古くはじめられた中国の養蚕は、次第にその周辺地域へ伝播していった。考古学的資料から、中国の周辺地域の養蚕のはじまりを一括すると、1-2表に示すとおりである。

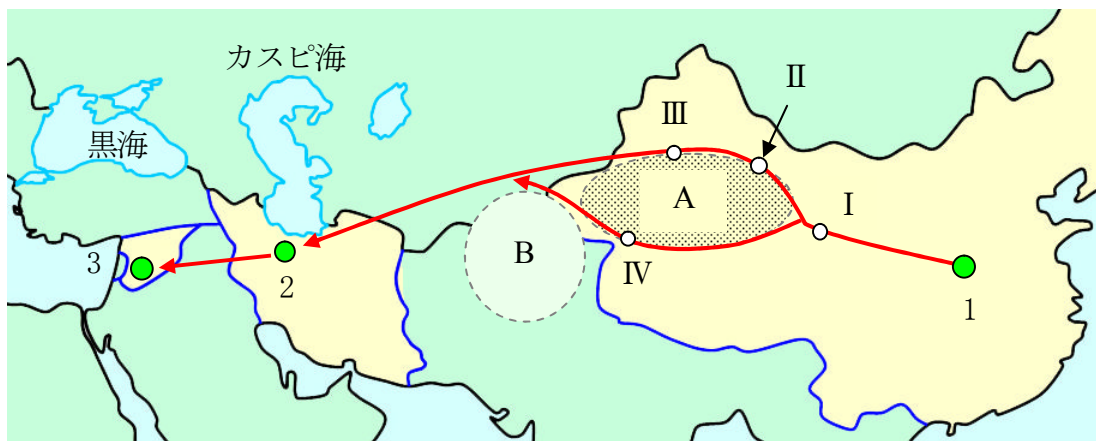
1-2表 各地における養蚕のはじまり（布目）

	中国（山西省夏県西陰村）	中国（河南省安陽県殷墟）	楽浪国	中国（僭耳・朱崖）	中国（哀牢夷）	中国（日南）	干闥国	伊吾	高昌国	濊	馬韓	辰韓	倭国（九州）	倭国（畿内）	東ローマ国（ビザンティウム）	ペルシア（北方）
25—20 C. B. C.	△															
17—11 C. B. C.		△ ○														
1 C.			△	○												
2—3 C.							△ ◎									
243—250 A. D.													○			
3 C 後半期										○	○	○				
4 C 後半期													△ ○			
5 C 前半期					○			○								
6 C 前半期						○										
6 C 半ばごろ									○							
500—562 A. D.															◎	
7 C																○

◎：養蚕の起こり      ○：養蚕の存在      △：養蚕に関する考古学的資料の存在

### 第3. シルクロード

シルクロードと呼ばれているのは、太古からアジアとヨーロッパとを結んで、東西の文化を交流させてきた交通路のことである。ドイツの地理学者であるフリードリッヒ＝フォン＝リヒトホーフは、中国をひろく実地調査して、「中国」という本を書いたが、その中に紀元前114年から紀元127年までの間に、現在の西トルキスタン地方とインドへ中国の絹を運んだ中央アジアの交通路を、ドイツ語でザイデンシュトラッセと呼んだ。シルクロードというのは、この英訳である。



1-7 図 シルクロード

1. 長安 2. イラン 3. シリア  
 I. ツンホワン II. カラコージョ III. クチャ IV. ホータン  
 A. タクラマカン砂漠 B. パミール高原

紀元前2世紀の前半は、中央アジアもシルクロードをめぐる東西貿易も、すべて匈奴が支配していた。漢の武帝はこのような劣勢をはね返すために、張騫に命じて中国から西域への交通路を打開させるとともに、徐々に匈奴を征討して西域をも支配し、漢の版図を大いに広めた。

シルクロードは、洛陽あるいは長安を出て、敦煌（現在のツンホワン）を経てタクラマカン砂漠の北側と南側に点在する高昌（カラコージョ）、焉耆（カラシャフル）、龜茲（クチャ）、干闥（ホータン）などのオアシス国家を結んで西進し、パミール高原を越え、イランの北側をとってシリアに達する、いわゆるオアシスルートを一線にしている。しかし、広い意味のシルクロードは、オアシスルートのさらに北側に行くステップルートと、海洋をまわって行くマリンスルートの合計三つの交通路を含めたものである。